G

教育

古代アメリカ土器の研究
「笛吹きボトル＋筑波大学附属視覚特別支援学校プロジェクト」

デザイン学部 工芸工業デザイン学科　真世土マウ

古代アンデス文明の産んだ工芸品の中に、器内を空気の動きで、内蔵された笛が鳴るボトル型土器がある。笛吹きボトルの研究は、東海大学、東京大学、放送大学とBIZEN中南米美術館の収蔵品を中心にその構造と製作技術を研究している。

今回は筑波大学附属視覚特別支援学校において、東海大コレクションの４つの古代アンデス土器を、生徒達が直接手で触れながら、いにしえの素晴らしい土器の造形力と息吹きを体験し、その後、生徒が自分自身のオリジナル“笛吹きボトル”を制作し、豊かな創造性と迷いのない創作ができた。“笛吹きボトル”を教材の中心として、このプロジェクト「音の奏でる風景」が大きな役割が果たすことが確認できた。

連絡先　真世土マウ　mau-macedo@dgn.oka-pu.ac.jp

どんぐりプロジェクト

共同

保健福祉学部子ども学科　小畑千晴、児玉太一、安久津太一、
保健福祉学部栄養学科　伊東秀之、デザイン学部建築学科　向山徹、

R6年に開催される植樹祭に向け、苗木の育成に取組む学生の自主的グループが結成され、R3年10月に活動がスタートした。保育者を目指す学生らが、自然との共生を体験的に学び、地域の親子に伝えられるために行っている。
ヒノキ苗木の育成と、本学に多数植樹されているどんぐりの育成、どんぐりを使ったクラフト作品作り、森林生態学の演習と講義、キャンパス内どんぐりマップの作成、親子むけリースづくり体験イベント、「縄文時代における食としてのドングリ」特別講義等を行ってきた。R5年は、これらの体験を踏まえて、絵本と歌等を作成したい。

［樹木版の制作］

［森林生態学の演習］

［森林生態学の講義］

［植樹活動］

連絡先　小畑千晴 chiharu_obata@fhw.oka-pu.ac.jp.

エディブル・エデュケーションを用いた幼児教育人材育成

重点

保健福祉学部子ども学科　小畑千晴、デスマレスエリック、児玉太一、安久津太一、山本孝司
保健福祉学部栄養学科　伊東秀之、川上貴代　デザイン学部建築学科　畠和宏

我々の研究チームでは、自然資本を社会基盤に据える発想を学び、予想不可能な時代に必要な文理の壁を越えた人材育成を目指す「『雑草型』幼児教育人材育成」プロジェクトを2022年4月より始動した。自然資本の重要性を幼児期の子ども達や保護者にも教え、伝えられることを目指すとともに、自然環境の循環を学ぶことが、人と社会との関係、人間関係の理解にも繋がることを体験的に学ぶためである。そのための具体的手法の１つとして、アメリカ発祥の体験的かつ横断的学習手法であるエディブル・エデュケーション（EE）を導入し、試行的取組を行った報告する。

実施時期：２０２２年４月～２０２２年１月　対象：子ども学２年生２５人
実施内容：種まき・苗植えなどの作業に加え、植物生態学・環境学・心理学・音楽・食育等を連関した講義
実施の様子：

［５月苗植え］

［９月子どもと大学生の学びの場］

［マルチングの講義］

［収穫した野菜の調理］

授業後のアンケート：EEの授業が自然環境への関心につながった100%、他分野への関心につながった90%、食への興味関心につながった90%、自然と人間の在り方を考える契機になった90%等の回答が得られた。

連絡先　小畑千晴 chiharu_obata@fhw.oka-pu.ac.jp.

道徳的な物語は子どもの誠実さを促進するか

独創

保健福祉学部子ども学科　　樟本千里
保健福祉学部保健福祉学科　４年　古好由佳、福田梨乃、村田智世

1.　問題と目的

幼児教育を含む初等教育において、絵本の読み聞かせに代表される「物語を語って伝えること：ストーリーテリング」は、子どもが社会生活を営む上で、必要となる貴重な教訓を身に着けるのに理想的な教材の一つである。子どもは幼い頃から、社会化の手段や文化的価値を伝える教育教材として、たくさんの物語や寓話に触れている（Henderson & May, 2005; Kim, Green, & Klein, 2006）。そこで、本報告ではグリム童話とイソップ童話をとりあげ、物語に含まれる道徳的価値についての検討（調査１）し、道徳的な話が幼児期の子どもたちの道徳性を促進するのかについて検討する（調査２）ことを目的とした。

2.　方法

複数の書籍から任意のグリム童話およびイソップ童話を選択し、グリム童話20話、イソップ童話52話の計72話を分析の対象とした。まず、調査者が各々童話を読み、童話に含まれていると考えらえるテーマをラベルした。その後、調査者全員で童話に含まれているテーマについて話し合い、それぞれの童話が含んでいるテーマを決定する手続きをとった。なお、童話によっては、複数のテーマを含み、話し合いで決定しなかったものは、複数のラベル付けも認めた。

3.　結果

グリム童話およびイソップ童話に含まれる１３のテーマを抽出した。すなわち、①賢さ、②因果応報、③嘘、④愛、⑤約束、⑥幸運、⑦正義、⑧努力、⑨正直、⑩幸せ、⑪優しさ、⑫欲、⑬素直さである。

１３のテーマにその他を加えて、グリム童話およびイソップ童話の特徴について、日本昔話と比較して考察する。

なお、子どもたちへの調査の実施が遅れており、現在準備中である。

連絡先　樟本千里 kusumoto@fhw.oka-pu.ac.jp

「保育ニーズの多様化」概念の再検討

保健福祉学部　子ども学科　　中野　菜穂子

　保育は、乳幼児の養護と教育を保障する専門的行為であり、子どもの人格形成上重要な位置づけにある。
　保育ニーズとは、子どもの健やかな育ちと保護者の安心できる子育て実現のために行政や保育機関に向けられた保育に関する要望の総称である。子育ちと子育てをめぐる社会的環境の変化は保育ニーズの多様化をもたらしている。

　その内容は以下のように大別できる。
　①保育所・子ども園への入所希望の増加による「量」の増大
　②保護者の労働環境に応じた保育時間等に係る要望
　③保育の内容や対象等に関わる「質」の向上への要望

　従来、保育ニーズは①と②にかかわるものとして保護者の視点から検討されがちであったが、保育を受ける主体である子どもの視点から再検討し、③の視点を中軸に据える必要があろう。
　すべての子どもに質の高い保育を受ける権利を保障する事、子どもを育てる家族のウェルビーイングの向上のために保護者の労働環境を抜本的に改善する事が課題である。

連絡先　中野菜穂子 nakano@fhw.oka-pu.ac.jp,

保育者養成校における保育内容「人間関係」の指導法における学びの特徴
ーパターン・ランゲージを用いた模擬保育の振り返りを事例としてー

保健福祉学部子ども学科　　京林　由季子

【目的】本研究では、子ども学科1年次の専門科目「保育内容（人間関係）の指導法」の2022年度の受講生の学びの特徴について報告する。本授業は、模擬保育（季節の行事）への取り組みを通して保育を構想し実践する方法を身に付けることを目標としている。チュッピーひろばの親子を招き、グループによる保育実践であることが特色となっている

【方法】受講生28名に、模擬保育終了後にパターン・ランゲージの1つである井庭（2014）のラーニング・パターンを用い、本授業における各自の学びの経験を39のパターンの中から3つ選択させた。選択したパターンについて相互に振り返る時間を設けた後にワークシートに理由と共に記述させた。

【結果】受講生が選択したパターンの割合を図1に示す。最も多かったパターンは「魅せる力」56.0％であり、次いで「目的へのアプローチ」44.0％であった。模擬保育の構想と実践を核とする本授業における受講生の学びの特徴を確認することができた。

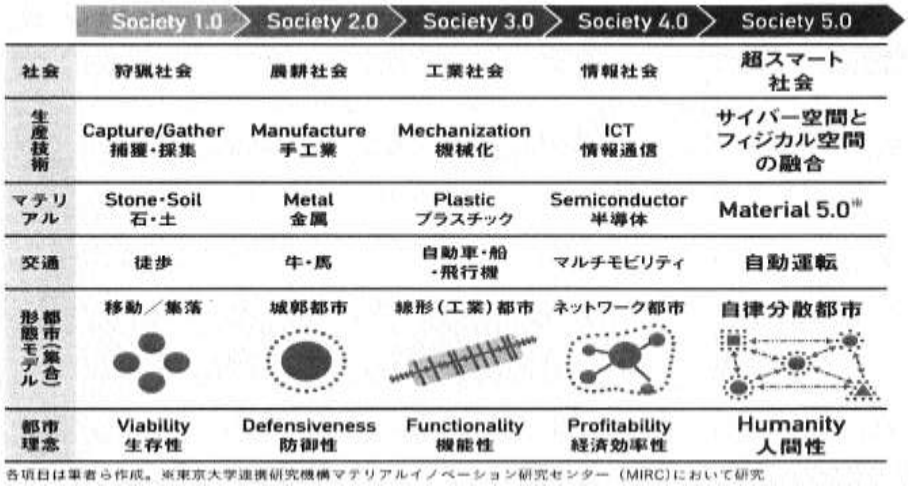
図１．受講生が選択したパターンの割合

連絡先　京林　由季子 kyoba@fhw.oka-pu.ac.jp

社会変動のなかの教育改革（２）
－「Society 5.0」のスローガンと「教育課題」－

岡山県立大学保健福祉学部子ども学科　池田隆英

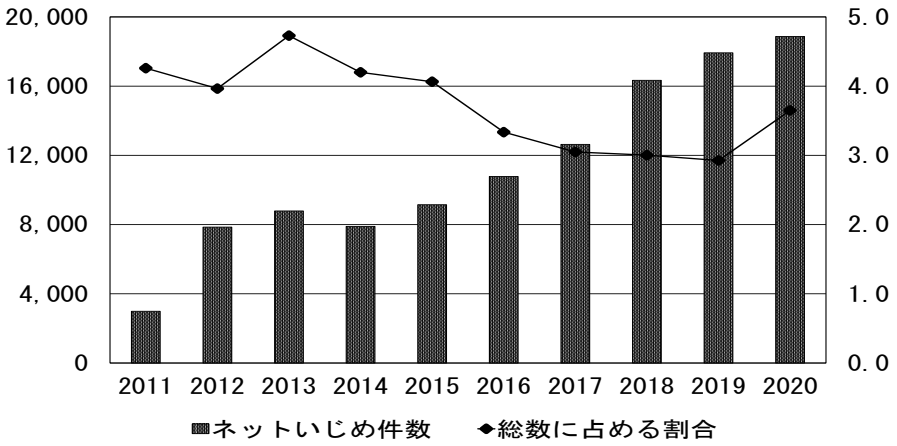
「Society 5.0」と「学校の情報化」は法令・基本計画に根拠を持つ。大きな展開は，内閣府主導「プラットフォーム」の整備，施策具体化の「教育振興計画」（第3期）による。「加速化プラン」以降，「要領」答申（H.28）には従来の「情報化」「ＩＣＴ」だったが，「構築」答申（R.3）には「個別最適」「協働的な学び」が明記された。「教育情報化推進法」（R.1）制定後，「GIGAスクール構想」が閣議決定され，「推進計画」（R.4）が策定された。従来，子どもをめぐる「非行・犯罪」「いじめ」「ネット利用」などが指摘され，情報化との関連で「依存・限界」「制約・市場化」「周縁化・肥大化」が見られる。「Society 5.0」に基づく「学校の情報化」プロジェクトは，「社会類型」「社会課題」「社会実装」「価値創造」から成る「複合体」で，「因果モデル」「教育市場化」「デジタル」「未来構想」という「背後仮説」を前提する。スローガンのようには，「情報化」によって「教育課題」が解決される道筋は見えない。



	Society 1.0	Society 2.0	Society 3.0	Society 4.0	Society 5.0
社会	狩猟社会	農耕社会	工業社会	情報社会	超スマート社会
生産技術	Capture/Gather 捕獲・採集	Manufacture 手工業	Mechanization 機械化	ICT 情報通信	サイバー空間とフィジカル空間の融合
マテリアル	Stone・Soil 石・土	Metal 金属	Plastic プラスチック	Semiconductor 半導体	Material 5.0※
交通	徒歩	牛・馬	自動車・船・飛行機	マルチモビリティ	自動運転
都市形態モデル（集合）	移動／集落	城郭都市	線形（工業）都市	ネットワーク都市	自律分散都市
都市理念	Viability 生存性	Defensiveness 防御性	Functionality 機能性	Profitability 経済効率性	Humanity 人間性

各項目は筆者ら作成。※東京大学連携研究機構マテリアルイノベーション研究センター（MIRC）において研究

「Society 5.0」の位置づけ
出典：日立東大ラボ（2018，p. 2）



ネットいじめの件数と割合
出典：文部科学省調査（2022）より筆者が算出・作成

連絡先　池田隆英 ikeda@fhw.oka-pu.ac.jp

コロナ禍の臨地実習における３年課程看護学生の実習適応感の関連要因

独創

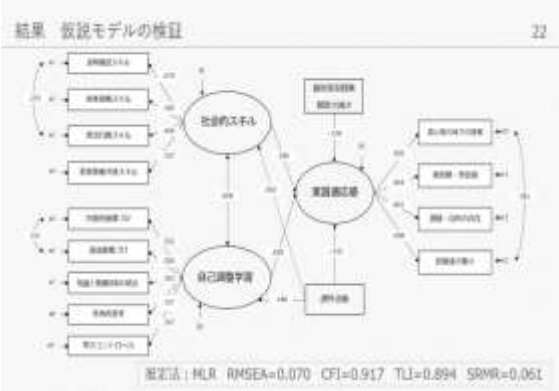
保健福祉学部看護学科　名越恵美、犬飼智子、實金栄
川崎医療短期大学看護学科　河畑匡法

社会的背景:18歳人口の低下と大学収容力や看護系大学数の増加により“大学全入時代”となった。そのため、生涯にわたる自己研鑽および　自ら学び続けられる基礎的能力を育む必要性がある。

目的:コロナ禍での臨地実習における3年課程看護学生の自己調整学習および社会的スキルが実習適応感に与える影響を明らかにすることを目的とする。

方法:看護師養成の大学及び短期大学合計11校の許可を得、自記式質問紙を配布、分析は、基本属性及び自己調整学習・社会的スキル・適応感の関連をM-plus Ver8.7を用いて解析した。

結果:回収数　307部(回収率34.5%)分析対象:305部(有効回答率99.3%)



考察:臨地実習における自己調整学習は、社会的スキルと相互に高め合いながら実習適応感に影響を与えるという関係が明らかとなった。自己調整学習を育むことで社会的スキルも向上しながら、実習適応感の獲得が期待できる。臨地実習に自己調整学習を取り入れることで看護学生のメタ認知が更に洗練されることが明らかとなった。自己調整学習を活用することで看護における社会的スキルも高まり実習適応感を得られやすい。一方で、臨地実習の学内への変更は実習適応感に負の影響を与えていた。
卒後のリアリティショックの軽減のためにも可能な限り臨地実習を行う必要がある。

本研究はR4特別研究費：独創を受けて実施した

連絡先　名越恵美　nagoshi@fhw.oka-pu.ac.jp

身体性アバタを介したリフレクションによる看護コミュニケーション教育支援システム

独創

保健福祉学部　看護学科　　髙林範子
情報工学部　情報システム工学科　　渡辺富夫、石井裕

人は単に言葉によるバーバル情報だけでなく、うなずきや身振り・手振り、表情あるいは周辺言語といった言葉によらないノンバーバル情報による身体性の共有により、対話者相互の豊かな関係性を成立させている。看護教育において学生がこの身体的コミュニケーションについて理解を深めることは重要であり、学生の行動変容を導き出すためには、身体的コミュニケーションを体験的に学習できるシステムが必要である。そのため、アバタを介して身体性を共有し対面コミュニケーションを実現できる身体的バーチャルコミュニケーションシステムを適用した看護コミュニケーション教育支援システムの開発を行っている[1)]。このシステムは、対話者が仮想空間上で自己と相手のアバタを介して対面コミュニケーションを実現でき、終了後に自動集積されたデータを基にロールプレイング場面を振り返ることができる。アバタを介することで対話者のノンバーバル情報や生体情報を制御・加工することで、各種条件下でのコミュニケーションを解析することができる。

現在は、看護に必要な傾聴のスキルとして、うなずきなどの気づきを促すためのアバタ影システムを適用したうなずき機能の開発（図）とアバタの表情変化の改良を行っている。また、対話者と身体性アバタとの身体的行為をあえて矛盾させるなどの矛盾的誘導法の解析手法の確立に向けた検討を進めている。

参考文献
1）髙林範子：VRを活用した看護コミュニケーション教育支援システムの有用性，看護人材育成4－5月号，Vol.19，No.1，P.59～65，2022.

連絡先　髙林範子　takaba19@fhw.oka-pu.ac.jp

栄養管理プロセス学習支援プログラムとOSCEの検討

独創

保健福祉学部栄養学科　川上貴代、久保田恵、首藤恵泉、田淵真愉美、井上里加子、丸田ひとみ
津嘉山泉、戸田圭祐、　保健福祉科学研究科　山本沙也加

多様な背景をもつ患者とのコミュニケーションと専門的アセスメント、多職種連携の視点を養うことは医療者教育で重要である。シミュレーションは管理栄養士学生の臨地実習前教育として期待される。我々は簡便で遠隔可能な学習支援としてオンラインOSCEトライアルを行い、評価基準の標準化、教育効果をオンラインで比較検討する。

評価者間の評価一致度κ係数は良好な値を示し、対面同様にオンラインでも評価の信頼性がえられた。また模擬患者との印象ともおおむね合致した。学習者から挙げられた利点は『場所を問わずできる』『オンライン指導の注意点やポイントを知れた』等であった。一方『目を合わせることが難しい』『音声が途切れたり画面が止まったりする』等の利用上の課題もあるものの、簡便なコミュニケーション学習評価システムとしての利用可能性が示された。

連絡先　川上貴代　kawakami@fhw.oka-pu.ac.jp

学士課程教育における看護学の学びの統合のための教授方法開発

重点

保健福祉学部看護学科　住吉和子、藤堂由里、岡﨑愉加、関根紳太郎、渡辺富夫
安酸史子（関西医科大学）

目的：看護学士課程教育では、日本看護系大学協議会の示す専門職としての能力と中央教育審議会報告書の示す学士力としての能力の「学びの統合」が求められている。
そこで今回は、講義・演習・臨地実習において、「学びの統合」を行うための教授方法を開発することを目的とする。

方法：①看護系大学カリキュラムについて、教員を対象とした看護教育におけるマザーマップに関する研修会を開催し、学科の教育について意見交換を行った。
②1年目に明らかにした本学科の教育方法の現状と課題を参考に、講義・演習、実習で学生が「わかった」と感じる状況についてグループインタビューを行い、機能的に分析した。その後、カリキュラム全体を見直し、学びを統合を促進するカリキュラム案を作成した。

結果：・看護教育におけるFDマザーマップの「教育」の「授業運営」と「臨地実習指導」について学科での共通認識を持つことができた。
・学生は高校生の時には復習をして「わかった」を実感していたが、大学では科目数が多いこと、範囲が広いことにより復習をしにくい状況にあることが明らかになった。
・学生が内容が難しくても毎時間の小テストや振り返り、系統的に学ぶことで「わかった」に繋がっていた。
・写真多いテキストは復習のしやすさに繋がっていた。
・講義中にさわったり、見たりする体験を臨地実習で実際に行うことで理解が深まっていた。

図１　看護教育におけるFDマザーマップ®の構造

連絡先　住吉和子 sumiyoshi@fhw.oka-pu.ac.jp

結果の詳細は当日ポスターで展示します。

大学教育における看護実践の質的向上に資する社会言語学的アプローチの有効性

独創

保健福祉学部　看護学科　関根紳太郎

本研究では、看護学の学際性（実践を主とする看護において、その理論的参照枠としてさまざまな学問領域が援用可能であるということ）、特に社会言語学との学術的親和性（学問的に違和感なく調和するということ）に着目し、継続的に研究をすすめることで、看護研究の発展に資することを目的とする。具体的には、コーパスと呼ばれる言語データベースを活用した量的分析とディスコースという「社会文化的意味をもった言葉のまとまり」を捉える質的考察により、言葉に置き換えられたさまざまな看護的現象を明らかにしていくことをねらいとする。そして、看護学における社会言語学的アプローチが、特にアンケート調査の自由記述欄などに内在する（言語記述の）意味や概念の抽出に有効であるという点について実証的に考察する。最後に、本研究の成果を学内紀要、卒業論文（執筆指導）、学会発表等において学術的エビデンスを残すことで、従来からある看護学の質的研究にコーパスおよびディスコース分析を活用した社会言語的手法が有効であることを検証する。

分析方法は、次の通りである。

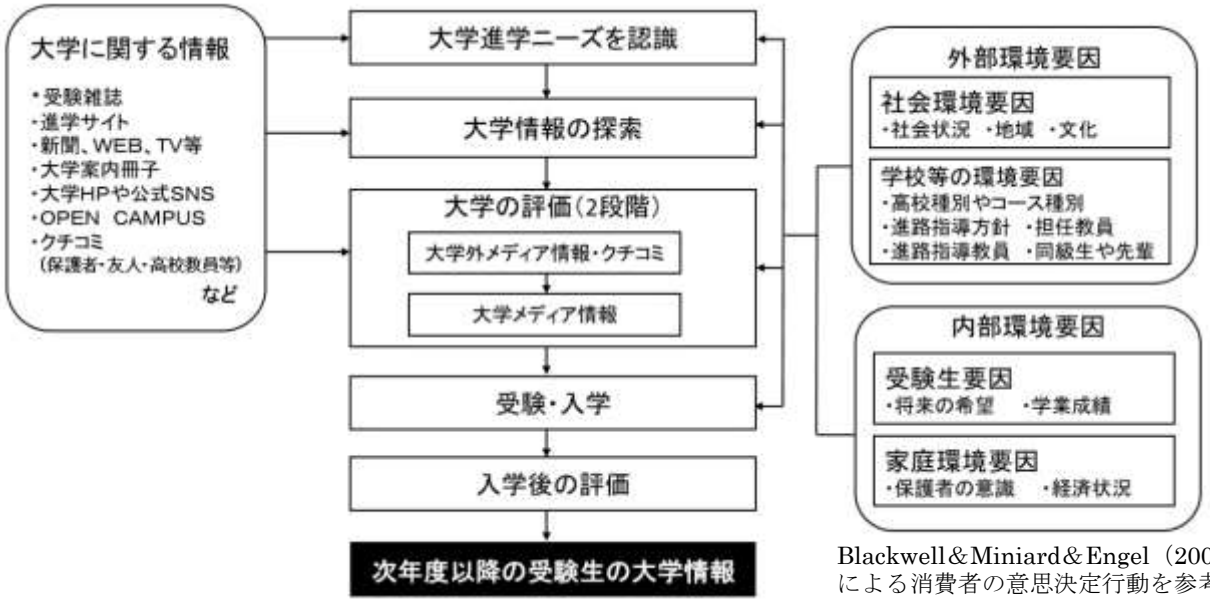
・研究キーワードに関して、無記名自由記述式のアンケート調査（オンライン形式）を実施
・アンケート結果を基に構築した分析対象コーパスの検証と統計的評価
・抽出された特徴語と関連語を内包するディスコース分析と意味要素の顕在化
・量的分析としてのコーパス分析と、質的考察としてのディスコース分析について、その妥当性を評価
・コーパス分析用コンコーダンサーとしてAntconcを採用
・日本語分かち書きツールとしてSegmentAntを採用
・特徴語抽出の統計的指標として対数尤度比を適用

連絡先：関根紳太郎 sekine@fhw.oka-pu.ac.jp

消費者行動理論からみた受験生の大学選択行動

保健福祉学部現代福祉学科　　喜村仁詞

ヒトは何かを購入・選択する行動には法則があることが明らかにされている（消費者行動理論）。受験生が大学を選定し入学するまでの経路は購買行動の一種といえ、消費者行動理論に基づいて分析を行うことが可能である。受験生の大学選択行動を解明は、どのような時期にどのような告知を行うべきなのかなど、より効果的な広報戦略の策定に寄与する。



Blackwell＆Miniard＆Engel（2006）
による消費者の意思決定行動を参考に作成

受験生は、大学進学へのニーズを認識すると、進学する大学の選定を行う。しかし、国内には約800大学が存在することから、初めは、学問系統や地域、自身の学力等少ない情報でざっくりと絞り込み、絞り込んだ候補を丁寧に吟味し受験校を決定する２段階方略を取る。これら各段階で使用される広告媒体はおのずと異なるものとなる。

連絡先　喜村仁詞　kimura@fhw.oka-pu.ac.jp,

企業×地域×大学の合体教育による「未来型思考×地域力」を付加した雑草型人材育成事業

「吉備の杜」創造戦略プロジェクト

「吉備の杜」推進室

「吉備の杜」創造戦略プロジェクトは、令和2年10月に文部科学省に採択された「県内産業発展に寄与できる人材」を出口（企業）と一体になって育成するプログラム構築事業です。予測不可能で急速な変化が生じる未来社会において、多種多様な環境圧をバネにする未来型思考と地域力を有した『雑草型リーダー』を育成することにより「高い専門性と幅広い人間力に立脚した地方創生を担うたくましい人材」を輩出します。

◎三方よし！「吉備の杜」流PBL演習：未来型プロジェクト・創造戦略プロジェクト

PBL（Project Based Learning）とは、文部科学省が推進するアクティブラーニングのひとつです。実社会で即戦力として活躍できる人材を育成するために有効な教育手法であり、学生が明確な目標を掲げ、できるだけ実際の業務の内容に近い1つのプロジェクトを完成させていくプロセスの中で、実社会で真に役立つスキルやノウハウを修得していくというものです。

◎「吉備の杜」で共創する学び：リカレント教育履修者の募集

「吉備の杜」創造戦略プロジェクトでは、社会人のリカレント教育の一環として、学部生・大学院生の開講科目の一部を学外の方も履修できる取り組みを実施しています。受講方法は、実際に大学にお越しいただく対面式、または、実際の講義を撮影した配信動画によってオンデマンド式のどちらかで受講可能です。社内教育や自己啓発の一助としてご活用いただいています。

連絡先　「吉備の杜」推進室 kibinomori@oka-pu.ac.jp